

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947 FAX 0952(24)8129

No.91



張公藝図 伝葉山朝湖筆 1幅

紙本墨画 116.1×49.4

17世紀・江戸時代 個人蔵

図上には、一部本紙欠失により文字を確認できないところもあるが、概ね次のようなことが記されている。中国唐時代、張公藝は「九世同居」した人物として知られた。つまり、北斎から隋、唐に至る9代の皇帝と同居したとする。麟徳年(664-5)中、高宗は名山として知られる泰山に赴き、公藝の家を訪れ、公藝を召し一族親睦の道を尋ねたところ、公藝は紙を請い筆を以て、「忍」の字を百余書き、忍ということが家を治める道であり、一族親睦につながると告げたといふ。

すなわち、図は椅子に坐る高宗の前で筆を取り「忍」の字を書く張公藝の姿を描く。いわゆる、勸戒画の一種で、類似するものとして狩野派内でしばしば制作された帝鑑図が挙げられよう。

本図には落款がなく、箱書きから作者を葉山朝湖とする。朝湖は、竜造寺氏の出で名は氏家、通称二介といい、改姓して葉山を名乗った。詳しい伝記資料を欠き生没年も不確かだが、江戸で狩野派に学んだと伝えられる一方、雪舟流あるいは長谷川等伯的などと評される。本図は、前述の通り狩野派の題材で、手法も狩野派絵師によるとみて大過ないものであり、朝湖の狩野派入門を裏付ける作品とみなししたいところだが、残念ながら、本図以外に朝湖の人物画の作例は知られず、現時点でとにかく朝湖真筆と断定することは控えたい。

<本誌6～8P「佐賀藩初期の絵師」参照>

目次

○張公藝図	表紙
○資料紹介	
「パリ万国博覧会から 深川長右衛門が持ち帰った品物」	P 2～3
○調査ノート「木綿織り綾通さま一赤糸・擗綾通紀行一」	P 4～5
○研究ノート「佐賀藩初期の絵師」	P 6～8

資料紹介

パリ万国博覧会から 深川長右衛門が持ち帰った品物 はじめに

深川長右衛門と言えば、我が国が正式に初めて参加した慶応3年(1867)のパリ万国博覧会に、佐野栄寿左衛門(常民)らと同行し、野中元右衛門(古水)がパリで急死した後、物産品の販売に苦心慘憺として当たった人物である。彼は博覧会終了後もパリに残り、洋服調製技術を習得して帰国し、全国に先駆けて洋服を広めた人でもある。その帰国際に持ち帰ったと伝えられているものが長右衛門の孫、深川栄次郎氏の夫人、マス氏(現在曾我美智子氏)によって佐賀県立博物館に寄託・寄贈され、◇池田史郎「慶応3年パリ万国博覧会に関する新史料」日本歴史256号(S.44.9) ◇酒井泰治・尾形善郎「佐賀藩海外交渉史の一画面—1867年パリ万国博の渡米資料について」蘭学資料研究会研究報告340号(S.54.3) ◇宇治章「幕末佐賀の海外交渉の一侧面—1867年パリ万国博について」佐賀県立博物館調査研究書第8集(1982)などで紹介されている。

しかし、昭和48年4月にサラダオイルなどと一緒に寄託されている10点のカタログについてはこれらの論文に紹介が漏れているので、ここに和訳してその概要を略述したい。

1. 深川家パリ万国博覧会資料

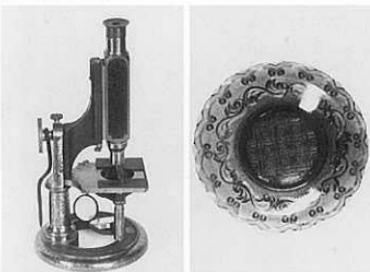
佐賀県立博物館は深川家から昭和48年、49年に寄託と寄贈を受けている。48年の寄託は次の6件、33点で①フランス製花瓶 1口、②顕微鏡 1台、③色ガラス皿 16枚、④サラダオイル 4本(モートン社サラダオイル箱付)、⑤各国出品カタログ10点の品々である。49年には、⑥1867年パリ万博出品カタログNo.1～No.155の寄贈を受けている。これらのうち②④⑥については前述の論文で紹介(②はロンドン製顕微鏡とだけ)されている。

①シャンティエ窯花瓶として収蔵されていたが、今回の調査で鈴田由紀夫氏(九州陶磁文化館学芸員)

の御教示により、胎土、ぼかしや白の盛り上げの技法などから明治中後期頃の薩摩焼であることが判明した。

②の台部にはUNIVERSAL MICROSCOPE SMITH BECK & BECK, LONDON 4311の刻印があり、英國製であることがわかる。

③の皿は径10.5cm、高さ1.9cm、高台口径5.2cmの型物のガラス製で、レースの縁取りのような口縁部をもち、唐草文が取り巻き、中心部は古伊万里などにも使われている花詰文を配している。透明なもの7枚、青緑の色物が9枚である。持ち帰った品々の記録などはまだ発見されていないが、これらの皿は文様などから見て、当時のヨーロッパの製品であろうと思われる。



② 顕微鏡

③ 色ガラス皿

2. ⑥の10点のカタログ

10点のカタログの表紙標題と住所の和訳は以下に掲載するが、うち⑨は寄贈カタログの73と同じものである。国別では英國5点、米国3点、仏国2点、であり、内容では農業関係が8点で、兵器1点、活字見本1点の割合になっている。この10点が前述論文から漏れた経緯については不詳であるが、深川長右衛門が持ち帰った一連のカタログであり、重複分を除くと総点数は165点になる。なお、和訳については樋島陽一郎氏(佐賀大学教育学部附属中学校教諭)とMs. Julia Harper(同講師)の御教示を得筆者の責任において対訳し記述した。

★ カタログ

- (1) Royal Agricultural Society of England Bury Meeting. The Reading Iron Works, Limited Late Barrett Exall and Andrewes, "Catalogue of Fixed and Portable Prize Steam Engines, and Agricultural Machinery" (Reading, Berkshire; and 27, Leadenhall Street, London)

- (1) 英国王立農業協会、ベリー大会、レディング製鉄有限会社「固定式及び可動式の高性能蒸気機関と農業機関に関するカタログ」(レディング、パークシャー27 レッドホール通り ロンドン)

- (2) "Catalogue of Howards' Patent Ploughing Engines, Steam Cultivators, and Steam Ploughs," (Manufactured by James & Fred Howard, Britannia Iron Works, Bedford) (London Office 4, Cheapside, E. C., Three Doors from St. Paul's,) -July 1, 1867-
- (3) 1867 Exposition Universelle de Paris. "Catalogue de Messrs. E. M. Reilly & Co., Armuriers et Arquebusiers" (502. New Oxford Street, Londres)
- (4) Price List of Steam Engines, Boilers, Thrashing Machines, Corn Drills, Horse Hoes, and Machinery required for the Cultivation of Corn, etc." (Manufactured by R. Garrett and Sons, Leiston Works, Suffolk, England.) (London Office, -36, Moorgate Street, E. C.) January 1867
- (5) "A Descriptive and Illustrated Catalogue of Philosophical Instruments." (A. H. Andrews, successor to Andrews & Bigelow, (Crosby's Opera House, No. 63 Washington Street, Chicago)
- (6) Coleman's Prize Cultivator, "Coleman & Morton's Illustrated Catalogue of Steam Cultivating Machinery, Prize Cultivators, and other Agricultural Implements," (London Road Iron Works, Chelmsford)
- (7) "Catalogue Illustré des Machines Agricoles Anglaises de Th. Pilter 1865" (9, Rue Fénelon, Place Lafayette—Paris)
- (8) "Douvelles Charrues Brevetées D'Acier Massif Fondu Fabriquées par Collins & Co.," Hartford, Connecticut, E. U. (Dépôt Principal, Chez Collins & Co., 212 Water Street, New York, E. U.) (Agent John G. Rollins, American Merchant, Old Swan Lane, Upper Thames Street, Londres, E. C., Angleterre)
- (9) "Spécimen de Caractères Japonais Kata-Kana" Gravés par Bertrand Loeulliet Graveur de L' Imprimerie Impériale Sous la Direction de M. Léon de Rosny Membre du Conseil de la Société Asiatique (Paris Fonderie de Bertrand Loeulliet Rue du Jardinet, 11.)
- ⑩ "Catalogue of Paschall Morris & Co. 'S Agricultural and Seed Warehouse," (N. E. Cor. Seventh and Market Streets, Philadelphia. James H. Bryson, No. 2 North Sixth Street, 1855.)

(2) 「ハワード社特許の耕作機関や蒸気耕運機、蒸気鋤のカタログ」(ベッドフォードのジェームズとフレッド並びにハワード英国製鉄所) (ロンドン事務所 4-チーブサイド E. C. セントポール寺院より 3 軒目) — 7 月 1 日 1867



カタログ(1)

(3) 1867 パリ万国博覧会「兵器商人であり火縄銃手である Mr. E. M. ライエー社のカタログ」(502 ニューオックスフォードストリート ロンドン)

(4) 「蒸気機関、ボイラ、脱穀機、穀物すじまき機、馬鋤や穀物の栽培に必要な機器の価格表」(英國サーフォーク R.ガーレット社とリーストン工場) (ロンドン事務所 36 モーアゲート通り E. C.) — 1 月 1867

(5) 物理機械の説明と図解入りカタログ (アンドリュースとビージローを受け継いだ A. H. アンドリューズ) (クロスピィ・オペラハウス 63 ワシントン通り シカゴ)

(6) コールマンの高性能耕運機「コールマンとモートン社の蒸気耕運機や高性能耕運機と農機具図解入りカタログ」(ロンドン ロード製鉄所 チェムスフォード)

(7) 「Th. ピルター社の英國製農機具図解カタログ—1865—」(9 Fénelon 街, Lafayette 町—Paris)

(8) 「コンリズ社製の鋼鉄製新案特許小さい桶板付き鋤」(本社 コリンズ会社 212 ウォーター街 ニューヨーク) (支店 アメリカ商人 John G. Rollins 旧白鳥小路 上ティームズ街 ロンドン イギリス)



カタログ(8)

(9) 「日本語カタカナ活字見本」一流印刷所の印刷師 ベルトラン ルウェイエ刻字 アジア協会会員 M. Leon Rosny 監修 (パリ ベルトラン ルウェイエの鋸物工場 ジャルディネ街 11)



(10) 「バスカル・モリス社の農業関係や種植物問屋カタログ」(北東角 7 丁目 マーケット通り フィラデルフィア) (印刷者 ジェームズ H. ブライサン 2 北 6 丁目街 1855)

(学芸課長 桶 渡 敏 暉)

調査ノート

木綿織り綾通さまざま —赤穂・堺綾通紀行—

佐賀県立博物館では平成2年度常設展の一期間に「鍋島綾通—いまむかし—」のタイトルで、木綿織り敷物「鍋島綾通」を紹介しました。その数は組物崩いをあわせて56枚の綾通と綾通碑拓本表裏一組でしたが、実際に展示し資料のための写真を撮り始めたところ、同じ木綿製の一種物敷物という基準にもかかわらず、絹糸・綿糸（ヌキイト）の太さのちがい、織り方に緊密なものと比較的ゆるいものがあり、織込糸の長短、粗密があり、片房と両房および房なしの始末、同じ房なしの始末にもかがったものと絹糸を結び切るものがありました。デザインにも大柄で力強い図柄、織細緻密な図柄のちがいがあります。織りや始末の方法から区別するとおおよそ三種類の木綿織り綾通を相手にするわけですが、佐賀県内で収集、借用した個人所蔵の資料に蔵庫資料を加えた「一骨物木綿織り敷物イコール鍋島綾通」と、いさか乱暴な規定で展示してみたわけです。

では、元禄年間以来「扇町紋既」（鍋島綾通の呼称）の技法を伝えた十二戸の家々から、明治時代にはいると織り元經營に変わり、一時の低迷期をへて大正時代に新しく二軒の織り元で再開された鍋島綾通の歴史を振り返ってみる時、はたして三種類も素材、技法を試みるものでしょうか。堅機で織る鍋島綾通を機械織りに考案した記録はありますが、実用化ならずといいます。

とすれば、鍋島綾通と木綿織り敷物で有名な赤穂綾通そして堺綾通を実地に比較検討して、この疑問を解明するしかないとい今回の調査旅行に出発、現状は赤穂綾通は現役の織り子一名、堺綾通では手織綾通の作品制作を続けてきた最後の一人が老齢で引退、府指定の堺手織綾通保存会が残るのみです。



堺では、明治時代の海外輸出期には麻綿通が主流を占め、大正時代に国内向けの普及品として木綿織り綾通を量産し、大正から昭和にかけて羊毛製の色鮮やかな高級品を中心とした生産体制に変化していったという歴史的な背景を知るほどに、鍋島綾通と比較し分類してみたい木綿織り堺綾通、とくに古い資料が地元堺には残っていないという現実の問題に直面することになりました。

拝見した手織綾通は重厚な織り、創作性の強いデザインと羊毛製という素材から中近東の絨毯により近い印象を受けます。堅機を使い太い木の柱で「編み込み」糸を締めて織るのですが、再生糸の縫糸を手で経糸にくぐらせる素朴な方法で大形の綾通を完成させる、まさに職人技です。織り始めと織り終わりは「編み込み」糸を絡めず平織りの部分を残して機からおろし、外注して裏側に折り込みかかるシャーリング仕上げの房なしです。

使いこまれ、木綿の再生糸が灰色がかった木綿製の敷物、しかも両端をまつて始末した綾通を堺綾通と一応の推測をしてみると、織込糸は短いものが摩耗や破損は少なく、おなじ一骨物を比較すると織り縮めがあまく、しなやかで難い数点にこの特徴がみられます。デザインは鍋島綾通の「蟹牡丹文」と赤穂綾通の「利劍文」、ともにそれの代表格といえる人気意匠がみられますが、鍋島、赤穂の絹と茶系統の濃淡を基調にした同じデザインの敷物とは單色や紫など微妙、多彩な色使いで一線をかくしています。堺には織物専門の製団師、写真やデザイン画から方眼に織り手本をおこす専門家「専図書き」があり、赤穂からも問屋注文の図案を堺に発注したといいますから、流行の国内向け図案を堺綾通に写すことはできますし、織り元で自家用の糸染めを行った鍋島、赤穂とはちがい染色工場に染を一任してきた堺綾通の色調が複雑でなのもうなづけます。

また、堺綾通の主流からはずれた木綿素材にこだわりすぎるきらいはありますが、実り豊かな「河内木綿」の産地をひかえて誕生した堺の敷物は、けっして粗末な普及品ではなかったはずです。

以上、木綿織り堺綾通の伝世品を確認するまでは「一応」の条件付きですが、堺綾通の定義と素朴な疑問を列記してみました。

赤穂でただ一軒残る綾通場、西田工房には三台の高機が並び、そのひとつに製作中の綾通が掛けられています。垂直に経糸を掛ける鍋島綾通（堺綾通も大形の機が多いがほぼ同形）の堅機を見慣れた目に

は、水平に絹糸を渡し織り上がった部分を手前の巻き棒に巻取っていく、反物を織る機と同構造の機で鍛通が織られていくのはめずらしい風景でした。

さて、赤穂鍛通の特色のひとつは絹糸・綿糸ともに撚った糸に糊付けして使うため、固くしまった織り上がりになることです。このため、「挟せ糸」（織込糸）の仕上がり5ミリと短い赤穂鍛通の織細巧妙な図案がより鮮明に表現できるわけです。

織込糸を絹糸にからめて鉄で切りながら横の1段を終え、縫糸で締め、全体の織込糸の長さを整えると通常の鍛通はできあがるのですが、ここ赤穂では「挟せる」というこの技術は初步の初歩、小学校がひけると鍛通場に通っては「挟せ糸を挟せる」手伝いで小遣いをもらうのが楽しみだったとか。

10センチあまり挟せ終わると、二段階の仕上げを施して、はじめて赤穂鍛通となるのですが、握り鉄の鋸い刃先でまず文様の輪郭にそって色を分ける「筋分け」をし、「逆筋」で境界線に鉄をいれて、「地つみ」で色の面となる部分を平に整えていくのが第一段階の「筋つみ」です。次に第二段階の「直筋」で「筋分け」、「逆筋」、「地つみ」を繰り返してはじめて赤穂の誇る鍛通の逸品となるのです。彫金のリーフや薄肉彫りと較べても遜色のないこの鉄使いなしには赤穂は語れないほどの高度な技術で、はじめて多種多様なデザインの細部を克明に表現できるのです。

織りと仕上げが終わると機からはずし、絹糸を耳の裏側に固い丸結びでまとめ、房はつけません。

その後、規格どうりの鍛通寸法に整えるため戸板にいた「仕上げ台」に裏を表に張り（釘で打ちつけるため、釘穴の残るものあり）、ジョウロで「水うち」をし、絹糸・縫糸にひいた糊が「挟せ糸」となじみ完成品となります。

このような赤穂鍛通の特色は、鍋島鍛通として入手していた館蔵資料や個人蔵資料のなかに確認することができました。鍋島鍛通との比較では絹糸・綿糸とともに細く、糊気のために固く織りしまった印象があり、この糊気が仇になり虫がきたものか縫糸の切れが古いものには見られます。木綿素材のため褪色はやむを得ないとして、「挟せ糸」の摩耗は少なく、「筋つみ」、「直筋」の仕上げも実際に見せていただき納得してみれば、微妙な凹凸が確かに残っており、褪色して輪郭の曖昧な時でも、この技術のおかげで写真には図案の全貌のわかるものがありました。絹糸仕上げの丸結びもほつれのない堅牢な作りです。意匠も複雑なものが多く「利剣文」のように縦横斜

めの線を複雑に組みあわせて鉄の腕を競い、外を「角線」、内を「コトバコ」という縁の帶文も類例を見ないほど種類が多く、これも特色の一つでしょう。

赤穂も明治から大正にかけて六軒の機場に鐵子20~30人という最盛期を迎えますが、産地の常としてその当時の赤穂鍛通はほとんど残っていないということです。鍋島鍛通の現状も変わらない、いかに巧みの技を振るっても高雅なはねの席を飾る敷物であっても、陶磁器や金工、漆工などのように高度な技術とデザインの完成された工芸品としての独自の価値を認められることなく日常の中に埋もれていった敷物の命運を見る思いでした。

この経験を活かして、鍋島鍛通、赤穂鍛通の独自性、伝統工芸として価値を再認識し、堺鍛通についてはさらに調査を続けて、そのうえで保存収集し体系的に残していく方法を探りたいと思います。

（当館学芸員 宮原香苗）

参考文献 パンフレット「赤穂鍛通之葉・赤穂鍛通製作所・パンフレット『第一回 赤穂鍛通と手織物展覧会』座右宝刊行会、S. 8・『堺市を中心とした敷物工業』（財）輸出敷物検査協会、S. 34・『産業技術史研究』より「鍛通について』岩崎雅美、S. 59・『赤穂の民俗 銀嶋編』より「赤穂鍛通の技法』廣山義道、S. 61



協 力 赤穂市歴史博物館 小野真一学芸員 堀市博物館 吉田豊学芸員 阪口きり江 田淵新一郎 田淵幸子 遠林峯太郎 西田進一 西田ヨシノ（敬称略）

〈写真解説〉昭和初期の赤穂鍛通製作工場（左ページ）
筋分け・直筋のすんだ部分（手前）

研究ノート

佐賀藩初期の絵師

佐賀藩初期、領内における絵画活動の多くは不明ながら、かろうじて藩のお抱絵師幾人かの存在を知ることができる。彼らのなかには、今日遺作が確認されない者もあり、なお未調査の部分も多いが、名前の残る絵師について、伝記事項と伝存する遺作の確認を行いたい。本稿では便宜上、支藩の状況については省略する。

その前に、佐賀の絵師に関する画史、画伝類について簡単に触れれば、管見では肥前佐賀の画人について、まとまった記述が現れるのはようやく江戸の後期になってからのようである。最も早いと考えられるのは、文化9年(1812)堤主礼(範房)が佐賀藩における諸道諸芸48部門の起源と主な人物を詳述する『雨中之伽』⁽¹⁾であり、つづく、弘化2年(1845)序文の『画学南北弁』⁽²⁾は、端唄「春雨」の作者として知られ、また画才のあった神道家柴田花守(1809-90)の画論で、肥前画人についての言及があり、さらに、安政2年(1855)書写の「肥前國画家略譜」⁽³⁾が挙げられよう。また、大正6年(1917)刊の狩野雄一編『西肥造訪』⁽⁴⁾は、少し時代は下るが「肥前の著名人物は一切本書に網羅せり」と編者が豪語する通り、多くの人物を収録し他書にはみられない知見も加わり参考となる。

狩野元頼(文周)(生没年不詳) 先祖は京都の勧修寺氏で、事情は不明だが築後に居たとき竜造寺氏の家臣となったという。元頼に至り命により京都で狩野派に学び狩野姓に改めたとされ、「文禄(1592-95)中」と活動時期が伝えられる。作例など具体的な絵画活動は知らないが、桃山期の竜造寺氏に仕えた狩野派絵師として興味深い存在である。

狩野宗俊(?-1654) 友坡あるいは友巴とも号す。藤岡作太郎氏の名著『近世絵画史』に、永徳沒後の慶長、元和つまり17世紀初頭頃の画界の状況を述べるなか「そのほか、京に沼津乗昌あり、肥前に狩野宗俊、渡辺了慶あり、肥後に宮本二天あり、いずれも狩野もしくは海北に学んで名を成せるものなり」と、宗俊が紹介される。

しかしながら、宗俊については本姓は甲斐、鍋島御抱えとなり物成十石五斗を拝領、また文禄慶長の後に從軍したと記録される程度で、作例も印文「友坡」(朱文壇印)を押す小品「寿老人図」(図1、鍋島報效会)が知られるに過ぎず、藤岡氏をして宗俊



図1 寿老人図 狩野宗俊 鍋島報效会

を先の如く記述させた根処としては、物足りなさは否めない。さらに、宗俊については狩野松栄直信(1519-92)に学び、山水、花鳥は宋元に遡るとする説もあり、以前は、宗俊作として伝存する作品も少なかったからである。

宗俊の弟子として大園明政(七兵衛、法名寂恵宗心、?-1657)が知られるが、鍋島勝茂⁽⁵⁾(1580-1657)に列じたため宗俊の系脈は途絶えている。明政の作品としては、慶安2年(1649)勝茂が寄進した「虎団絵馬」(諸富町・安龍寺)がある。

葉山朝湖(生没年不詳) 竜造寺豊後守信親の次男で名は家氏、通称を二介(助)といい、朝湖は号である。「潮湖」と記すものもあるが、ここでは「山水図(贊朱明義)」(熊本県立美術館)の落款が署名、印文とともに「朝湖」とあるのに従う。朝湖の父信親の曾祖父父家と、竜造寺隆信(1529-84)の曾祖父家兼は兄弟で、家兼にはじまる水ヶ江竜造寺、さらに胤家、家兼の兄弟家員が嗣いだ宗家の村中竜造寺に対し、家胤は与賀にあった太宰少貳氏の居館を屋敷としたといい、その家系を「与賀竜造寺」と呼ぶこともあるらしい。⁽⁶⁾

朝湖は姓を葉山に改めているが、朝湖に限らず竜造寺一門の多くは、佐賀において竜造寺氏から鍋島氏への政権交代が行われた結果、そのまま竜造寺姓

を名乗り続けることを憚ってからか、改姓を行っている。しかしながら、朝潮の竜造寺氏に対する思いは強かったとみえ、竜造寺伯庵が幕府に対し竜造寺氏再興の訴訟を起こした時、朝潮は江戸にあってこの訴訟を支持した。不穏な企てがあるとしての藩邸への召喚を拒み、そのため差し向けられた捕手に「其門弟數人」と抜刀し反抗するも、ついに捕らえられた。佐賀に送還後、多久美作守茂辰の屋敷に預けられ、やがて切腹を命ぜられた。寛永14年(1637)頃のことと伝える。

朝潮の絵画活動については、佐賀藩が幕府に提出するため、慶長10年(1605)から作成に取り掛かった「慶長年中肥前国絵図」に関係して、そのものとなる朝潮の絵図が存在したと推測され、朝潮の絵図方としての活動の一面が知られる。また、慶長12年(1607)隠居した鍋島直茂(1538-1618)の命により、多布施の隠居所に吉野の景を書き、あるいは加藤清正(1616)の求めに応じ熊本城の「屏壁」に描いたとされる。共に実作は現存せず、熊本城障壁画制作については、築城の時期は慶長15年(1610)頃で、狩野永徳(1543-90)の門人12名を招き描かせたと伝えられるが、朝潮の參画については不明。しかしながら、以上のことから朝潮は慶長10年代には絵師として活動していたことが知られる。

「古画備考」によると「其画多在肥州」とされるが、現在知られる作品は、前述の熊本県立美術館蔵「山水図(賛朱明實)」のほか、「山水図屏風」(ボストン美術館)、および箱書きから朝潮筆とされる「張公藝図」(表紙)と「龍図」があるのみで極めて少ない。また、「本朝画纂」には作例として「帆船図」の名がみえる。落款を有す「山水図」と「山水図屏風」は、両者とも雲谷派の要素を含むダイナミックな構成の作品で、個性的な表現が目立ち、ほぼ同一個性を予想させるものである。この二点に共通する画風は、鍋島家伝来で元は襖絵だったと考えられる作者不詳の「山水図屏風(押絵貼形式)」(佐賀県立博物館)にも認められ、朝潮の可能性が指摘されよう。一方、朝潮の伝承を持つ二点のうち後の補筆の多い「龍図」はさておき、「張公藝図」の方は狩野派的なものである。

朝潮については、具体的な師弟関係は知られず、ただ江戸で狩野派に学んだとのみ伝えられる。これをそのまま信用すれば、狩野探幽が正式に江戸幕府御用絵師となったのは元和3年(1617)で、江戸銀治橋門外に屋敷を拝領するのはその4年後のことであり、狩野派の江戸での本格的な活動はこの頃以降と

考えられている。したがって、前述の通り寛永14年頃には江戸に居たことを併せ考えれば、朝潮の狩野派入門は彼の晩年の時期に属すということになろう。朝潮の画風について、雪舟流あるいは長谷川等伯的、さらには中国明の李源(松山)を慕うなどの評があるのは、狩野派学習以前の作品を指しているとも考えられ、前述の通り作品間に作風の相違がみられることも一応説明がつく。

また、能書家としても知られた朝潮には、江湖という子とも弟子とも伝えられる人物がいたことが知られる。

小原友闇斎(1606-?) 明暦2年(1656)に御抱えとなったことが知られるほか、「古画備考」狩野門人譜に狩野有信として記載され、富士の図を得意とし、狩野永真安信の弟子の筆意があるとする。同書に「寛文拾貳(1672)曆仲夏十三日/友闇斎有信六十七斎筆図」なる款記が引用され、逆算して生年がわかる。さらに「七十歲筆」の「富士山図」も知られ、没年は延宝2年(1675)以降ということになり、その作風および年齢からか探幽の最も早い頃の門下とも考えられている。「富士山図」のほか、「黄石公張良図」(図2、鍋島報效会)「神農図」(佐賀県立博物館)「七夕図」(佐賀市・与賀神社)「河上図」(鍋島報效会)が知られる。

「富士山図」「黄石公図」「神農図」は、狩野派的な堅実な水墨表現で、一方「七夕図」と「河上図」は着彩による大和絵的な作例である。

友闇斎の子孫は、享保(1716-35)の末、偽札をこしらえた罪により家を断絶させられてしまったという。系譜に連なる絵師として友益、季徳および閑悦の名が残る。

林永信(1605-86)
勝茂の御抱えで
「古法眼元信子林
雪法眼宗信ノ二男



図2 黄石公張良図 小原友闇斎 鍋島報效会

之信ノ長男」、通称孫助、法名盛晉淨寛と伝えられる。出自について、元信の子とされる宗信の「林雪」は「祐雪」の誤りとしても、画史画伝類に宗信に実子がいたと記すものではなく二男之信なる存在は疑問である。⁽²³⁾ いざれにせよ、狩野派絵師とする永信には、さらに乗信(1648-1714)、尚信(1711-28)と続く世襲と思われる系譜が知られるが、残念ながら三人とも遺作は確認されていない。

紹介した兩人は、16世紀末から17世紀中頃までに活動した絵師たちで、概ね佐賀藩初代藩主勝茂の生きた時代に重なる。狩野派入門が藩命であったと伝わる絵師もいるほか、何れの絵師も師弟関係は必ずしも明らかでないが狩野派に学んでいた。つまり、藩体制を確立しつつあった時期に、御抱え絵師として狩野派画人を採用しようとする意志が働いていたと解される。これは、幕府が狩野派を御用絵師とし、他の多くの藩も同様の事情であったことと呼応するもので、この時期、複数の絵師を抱えていたことがわかる。

佐賀藩初期の絵師たちは、宗俊、朝潮、友閑斎の場合のようにやむを得ず画系を絶たざるを得なくなった場合もあるが、何れもその画系を承く継続させることができず断絶してしまう。それでも複数のお抱え絵師の存在は、18世紀初頭頃まで継続するが、それ以降は絵師の名を見いだせない時期もあり、ついに佐賀藩では長期にわたる世襲のなお抱絵師の系譜は存在しない。結果的には、佐賀藩におけるお抱絵師の必要度は低かったとみなすことが可能であろう。⁽²⁴⁾ だが、現に複数の絵師を抱えていた時期があるわけであり、佐賀藩の体制内でのお抱え絵師の実際的な任務がどのようなものであったか、今後解明していく必要がある。そのためにも、作品と資料の発見が不可欠であることはいうまでもない。

註

- (1) 堀主礼「雨中之伽」、鍋島文庫に収められるほか『隨筆百花苑』第15集（中央公論社）に翻刻。
- (2) 萩田花守「画学南北弁」上・下（明治15年刊）上
- (3) 作者不詳「肥前國画家略譜」（安政2年平巣雄寫）鍋島文庫に収められる。

- (4) 狩野雄一編「西肥遺芳」（大正6年 西肥日報）
- (5) 註4)
- (6) 佐賀県立博物館編「肥前の近世絵画」（昭和52年3月）に狩野文周筆「勿来閑闋」が掲載されるが、画風的に時代が下り、落款の「文周」の「文」の書風は、谷文晁の後期の「文」の署名に類似するところから、文晁門人に名を連ねる小林文周の作品の可能性を指摘したい。
- (7) 藤岡作太郎「近世絵画史」（昭和58年7月 ペリカン社／明治36年初版 金港社）19頁。
- (8) 註3)
- (9) 註2)
- (10) 註3)
- (11) 萩原荒野編著「校註葉隱」（昭和50年4月 青潮社／昭和15年初版）425、および同註。
- (12) 「竜造寺龍家墓銘」（佐賀市・本行寺）
- (13) 註4)
- (14) 「鍋島生三宛勝茂書状」（佐賀県資料集成）11巻「坊所鍋島家文書」229号）および、藤野保編「佐賀藩の総合研究」（昭和56年2月 吉川弘文館）766頁。
- (15) 註11298。
- (16) 註4)
- (17) 熊本県立美術館編「肥後の近世絵画」（昭和54年9月）
- (18) 朝潮の狩野派入門については、註4)および朝潮の兄茂親こと藤井寛右衛門の子孫藤井左馬助が弘化3年（1846）藩に提出した下記「系図」（鍋島文庫）にも記される。（原文翻訳）

葉山二介 工工瀬湖ト称号
家氏 母同シ竜造モ改テ葉山改号ス
一 朝潮幼ニシテ訓ノ妙ヲ得候シ付有命江戸ニ趣キ
狩野家ノ画房学校 御秘藏被 遊御戲前五拾
伎被為 拝領御用画被 仰付候テ御恩賜
頂戴仕諸侯大相共ニ美シ以テ恩美ヲ受ク
既ニ名 台曉ニ達シ朝ニ召シ繪シム名以テ
鳴ル御家ノ制合ニ達シ候テ御恩元被召下多久家ニ
御預ケト成ル或ハ切腹被 仰付共 幕半詳ナラス
- (19) 註1), (2)
- (20) 註1)
- (21) 註3), (4)
- (22) 細野正信「江戸の狩野派」（日本の美術 No262 昭和63年3月～至文堂）
- (23) 註3)
- (24) 註3)
- (25) 註3)に「次郎右衛門／有馬陣御法名忍ヨ 正徳四午八月十二日卒六十七歳」と記す。
- (26) 註3)に「五右衛門 久ヨ／享保十三年甲年六月十一日十八歳」と記す。
- (27) 承応3年（1654年）にお抱絵師となった広渡雪山（?-1674）については、10数例の作品が確認され、別の機会に詳述したい。
- (28) 註6)佐賀県立博物館編「肥前の近世絵画」
(当館学芸員 福井尚寿)